31-0653

茯苓の性状と成分との相関

○渥美 聡孝[1]，垣内 信子[1]，中村 憲夫[2]，服部 征雄[2]，御影 雅幸[1]([1]金沢大院薬，[2]富山医薬大和漢薬研)

【目的】生薬茯苓は多くの本草書中で「白いものが良い」とする記載が見られる。現在市場品では中国産茯苓の方が北朝鮮産よりも明らかに白い。わが国では刻み生薬として、北朝鮮産を好んで使用している医院・薬局も多い。そこで品質と性状の関係を明らかにする目的で、茯苓の主成分でもあり薬理学的な研究の進んでいるトリテルペン成分を中国産、北朝鮮産の茯苓について比較した。さらに同一産地、同一遺伝的背景を有する長野県産茯苓についても個体間の変動を調べた。
【方法】長野県塩尻市の一箇所で採集した野生品茯苓は深部培養によって菌糸を成長させ、対峙培養した。中国産大阪市場品、北朝鮮産茯苓、長野県産野生品茯苓をそれぞれ粉末にして色彩計にてその色を L* 、a* 、b* 値で測定した。また、粉末は MeOH で超音波抽出し、HPLC で定量した。全 DNA を DNeasy Plant mini kit を用いて抽出し、PCR で増幅後、DNA 塩基配列を解析した。
【結果】長野県で採集した茯苓を対峙培養した結果、全て同じ遺伝的背景を有することが分かったが、各個体の色とトリテルペン成分を分析した結果、色・含量ともに大きな変動がみられた。一方、中国産と北朝鮮産のトリテルペン成分は、長野県の採集品に比べ、若干少なかったが両者には明確な差が認められなかった。このことから茯苓のトリテルペン成分からは中国産茯苓のほうが優れているとは言えなかった。また、赤・白の記載が見られた市場品茯苓もトリテルペン成分では大きな差がなかったので、赤・白といった茯苓の色差はこれらの成分以外によると考えられる。